慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	柳田國男とグリム
Sub Title	Yanagita Kunio und die Brüder Grimm
Author	佐谷, 眞木人(Saya, Makito)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.58 (2019.) ,p.131- 144
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	羽田功教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Isao Hada
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20190331-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

柳田國男とグリム

佐　谷　眞木人

1. はじめに

グリム兄弟による „Kinder- und Hausmärchen“（『子供と家庭のためのメルヒェン』以下，KHM）は，日本では一般に『グリム童話集』という書名で読まれてきた。当然のことだが，„Märchen“ という語には「子供向け」というニュアンスは含まれていないので，「童話」という訳語は必ずしも適切ではない。民俗学者の柳田國男（1875 ～ 1962）はこの『グリム童話集』という呼称について強く批判的であり，KHM を『児童及び家庭の説話』あるいは『児童家庭説話集』などと訳している。柳田は，「童話」では創作と伝承の見極めがつきにくく，またグリムが聞き書きをしたような民間伝承は元来，児童のために作られたものではないと指摘し，「誤訳であったといふことになる」と述べている[1)]。柳田はまた，ドイツ語には日本語の「昔話」に相当する適切な言葉がなかったために，グリム兄弟はメルヒェンの語を用いたのだとも指摘している[2)]。

確かに，本書の内容が民間伝承の聞き書きをもとにしていることを考慮するならば，『説話集』と訳すべきという柳田の主張は首肯できるが，一

1）柳田國男「昔話覺書」（『昔話研究』1 号～ 12 号，1935 年 5 月～ 1936 年 4 月，のち「昔話と傳説と神話」と改題して『口承文藝史考』所収）

2）註 1 に同じ。

方で柳田自身が著作において『グリム童話集』という呼称を用いている事例も散見する[3)]。それだけグリム「童話」という呼称が，柳田が昔話に関する論考を次々に発表した昭和初期の社会にすでに定着しており，その呪縛が強かったということだろう。KHM が日本で『グリム童話集』と呼ばれ，子供向けの読み物へと矮小化されて受容された経緯については，中山淳子が詳しい。中山によれば，KHM は明治 20 年代にドイツのヘルバート学派による教育の「教材」として日本に導入されたために，日本では当初から「童話」という訳語が用いられ，主として教育学者たちや文部省が主導する形で「童話教育」が進められていった。そののち明治末年頃から大正にかけて鈴木三重吉らによる創作童話が盛んになって「童話」という呼称が一般化していったようだ[4)]。

また，KHM の子供向けのお話としての受容に際して，児童文学者であった巌谷小波（1870 ～ 1933）が果たした役割も無視できない。巌谷小波は『少年世界』などの少年雑誌を中心に「お伽噺」として KHM を精力的に紹介し，明治から大正期にかけて子供たちの人気を獲得していった[5)]。大正時代には「お伽噺」と「童話」という呼称は混在しつつも，次第に「童話」が優勢になり，社会に定着したのである。

このような児童向けの教育的な読み物としての KHM の受容は，KHM のもう一つの側面，すなわち民間伝承の記録という面を後退させることになった。柳田國男ら民俗学者たちが KHM の影響のもとに昔話研究を盛

3）「物いふ魚」（『方言と国文學』2 号，1932 年 1 月，『一目小僧その他』小山書店，1934 年所収），「昔話覺書」（『文學』5 巻 3 号，1937 年 3 月，のち「花咲爺」と改題して『昔話と文學』創元社，1938 年所収）など。これらの用例は文脈から判断して意図的に「童話」を用いたとは考えられず，いわゆる「ケアレスミス」だろう。

4）中山淳子『グリムのメルヒェンと明治期教育学――童話・児童文学の原点』（臨川書店，2009 年）

5）奈倉洋子『日本の近代化とグリム童話――時代による変化を読み解く』（世界思想社，2005 年）

んに行うようになるのは昭和初期以降であり，本書の日本への紹介からおよそ 40 年のタイムラグがある。つまり，KHM は日本において，「童話」として受容されて社会に定着したのちに，本来の民間伝承の聞き書き（昔話）という側面に光があてられるようになったと言えよう。柳田はグリムを民間伝承研究の先駆者に位置付けるために，KHM が『グリム童話集』と呼ばれることを否定する必要があったのである。以下に，柳田とグリム及び KHM の関係を通して，グリムが日本の民俗学に与えた影響について考察したい。

2. 柳田はいつ，どのようにして KHM と出会ったのか

現在，成城大学の「柳田文庫」の所蔵されている柳田國男旧蔵の KHM は，横山ゆかによれば 1900 年頃に刊行されたレクラム文庫版（第 7 版）であり，また，巻末に柳田家に養子に入る前の「松岡」姓が記されているという。柳田が養子に入るのは，明治 34 年（1901）5 月である。そのような事情から勘案して，横山は柳田が明治 32，3 年ごろに KHM を入手したと推定している [6)]。当時の柳田は東京帝国大学法科大学を卒業して農商務省に入省した頃で，同時に新体詩の詩人でもあり，また，田山花袋や島崎藤村，国木田独歩といった作家たちとも親しく交際していた。まだ，民俗学を志す前で，柳田が本書を購入した動機も文学的な興味からだったと推測される。

この KHM に関して，柳田に大きな影響を与えたと思われるのが高木敏雄（1876 ～ 1922）である。高木は東京帝国大学文科大学ドイツ文学科卒業。柳田より一歳下であった。明治 37 年（1904），27 歳にして『比較神話学』を出版した神話学，昔話研究の専門家で，柳田との出会いは明治 44 年（1911）11 月の神道談話会の席上であった。当時，高木は東京高等師範学校でドイツ語を教えていた。そののち高木は新渡戸稲造が主宰し柳

6）横山ゆか「柳田國男による『グリム童話集』の読書過程――柳田文庫蔵 KHM（第 7 版）の書き込み調査」（『成城文芸』231 号，2015 年 6 月）

田が幹事役を務めた郷土会に参加するとともに，大正 2 年（1913）3 月に柳田と二人で雑誌『郷土研究』を発刊している。また，高木は同年には郷土研究社から『日本伝説集』を刊行している。これは東京朝日新聞社が明治 44 年暮れから大正元年夏までの半年間，全国から公募した伝説をもとに編纂したものである[7)]。『郷土研究』や『日本伝説集』を出版した郷土研究社は，柳田の義理の甥にあたる岡村千秋が経営した出版社であった[8)]。残念ながら，恐らくは編集方針の違いから翌大正 3 年には高木は『郷土研究』の編集から手を引き，柳田との関係は疎遠になってしまうが，その前から約二年間，二人の間には濃密な交際があった[9)]。

高木は，先の『日本伝説集』と同年に『修身教授――童話の研究と其資料』を刊行しており，ヘルバート学派の強い影響のもとに教育的観点からグリムを受容した一人であった。そのため高木は積極的に「童話」という呼称を用いている。高木は『郷土研究』にも，「日本童話考」「人身御供論」「英雄傳説桃太郎新論」「早太郎童話論考」などの論文を載せており，また，大正 5 年（1916）には婦人文庫刊行会から『童話の研究』を上梓している。高木は日本における最初期の昔話研究者であり，まさに日本のグリムを目指していたといえよう[10)]。この高木と親交のあった柳田は，高木を経由して KHM に関する様々な知識を獲得したと考えられる。しかしながら，この時期の柳田には，まだ，昔話研究に関する強い関心は認められない。独文科出身の高木に対する遠慮もあったのであろうが，柳田の著作の中にグ

7）野村純一他編『柳田國男事典』「高木敏雄」の項（勉誠出版 1998 年）770 頁。

8）岡村千秋については，荒井庸一「柳田民俗学の山脈――岡村千秋」（柳田國男研究会編『柳田国男・ジュネーブ以後』三一書房，1996 年）が詳しい。

9）中山淳子は，「グリム兄弟やドイツ語の文献を読むことにおいては，柳田は独文科卒の高木の敵ではありえず，高木の「新しすぎる」学問に対して微妙な状況が生じ，そこに二人の齟齬の一端があったかもしれないという推察もできる」と指摘している。（中山，前掲註 4，155 頁）

10）高木と KHM の関係については，中山，前掲註 4，123 ～ 146 頁。

リムへの言及が認められるのは，年号が昭和になってからのことである。

なお，先のKHMが「童話」か「説話」かという関心からいえば，高木は「童話」の語が山東京伝や曲亭馬琴ら江戸時代の作家たちによってすでに使われていることを例証し，「童話」という呼称の正しさを力説している。これについて中山淳子は「このころ日本の教育界の権威たちもこぞって「童話」という語を使い，広く定着していた」のであって，高木はその「理由付けを求め，みごと探し当てたのだ」と指摘している[11)]。これを考えると，のちに柳田が「童話」を強く否定していることは，高木への批判となっていたことがわかる。ただし，柳田が昔話研究に傾倒し，「童話」を批判していく昭和初期には，高木は既にいない。高木は残念ながら大正11年（1922）に既に病没している。

一方，岩本由輝は，明治43年（1910）刊の柳田の『遠野物語』にグリムの影響がみられると指摘している[12)]。柳田はこの時既にKHMを所持しているから，同書が『遠野物語』に潜在的な影響を与えた可能性は十分に考えられることではあるが，この時点では柳田はまだ昔話研究に本格的に取り組む意図はなかったと思われる。また，柳田が所持していたKHMは第7版なので，『遠野物語』の序文にKHMの第2版が影響を与えているのではないかという岩本の指摘も，憶測の域を出ない。柳田は『遠野物語』の出版以降，約20年間，昔話にもグリムにもさしたる興味を示していないのである。とするなら，岩本が『遠野物語』にグリムの影響を見るのは，戦後に『遠野物語』が柳田民俗学の始発点として再評価されるようになった結果でしかない。柳田が昔話研究に本格的に取り組むのは，昭和初期以降なのである。

11）中山，前掲註4，128～129頁。

12）岩本由輝「『遠野物語』と『グリムの昔話』——伝承記録における書き替えの問題」（『柳田國男を読み直す』世界思想社，1990年）

3. 渡欧後の柳田と昔話研究

それでは，柳田はいつから，どのようにグリムについて論じるようになったのだろうか。そこで以下に，柳田がグリムに言及している文献を年代順に拾い上げてみたい。

・「昔話解説」（『日本文學講座 16』新潮社，昭和 3 年 4 月，のち『昔話覺書』三省堂，1943 年に所収）
・「桃太郎の誕生」（昭和 5 年 1 月，桃太郎の話をきく會講演，『桃太郎の誕生』三省堂，昭和 8 年 1 月所収）
・「桃太郎根原記」（『文學時代』昭和 5 年 5 月）
・土橋里木著『甲斐昔話集』解説（郷土研究社，昭和 5 年 6 月）
・「鄰の寝太郎」（『旅と伝説』昭和 5 年 7 月）
・『郷土生活の研究法』（刀江書院，昭和 10 年 8 月。昭和 6 年 8 月，伊勢神宮皇學館における「郷土史研究の方法」の速記に加筆したもの）
・「口承文藝大意」（岩波講座『日本文學』昭和 7 年 4 月）
・「竹取翁」（『國語・國文』第 4 巻 1 号，昭和 9 年 1 月）
・『民間伝承論』（共立社書店，昭和 9 年 8 月）
・「昔話覺書」（『昔話研究』1 号～ 12 号，昭和 10 年 5 月～ 11 年 4 月，のち「昔話と傳説と神話」と改題して『口承文藝史考』所収）

以降は省略する。

上記に明らかなように，柳田のグリムへの言及は，昭和 3 年（1928）の「昔話解説」に始まっている。これは柳田が初めて書いた昔話に関する論説文であり，新潮社の仕事ではこのあと，昭和 7 年から 10 年にかけて刊行される『日本文學大辞典』に数多くの昔話の項目を執筆していくことになる。さらに，昭和5年（1930）になるとグリムへの言及が増えること，また，『郷土生活の研究法』や『民間伝承論』といった，柳田が研究の指針を明らかにした著作において，グリムを取り上げていることも重要であろう。このようなグリムへの関心のあり方は，一方で柳田の昔話研究と密

接に関わる問題である。

じつは，この昭和初期は，柳田が昔話研究へとのめり込んでいく時期とほぼ完全に一致しているのである。石井正己は，柳田が急速に昔話研究にのめり込むのは，『遠野物語』の語り手であった佐々木喜善が大正 15 年（1926）に『紫波郡昔話』を出したころからであり，その成果が昭和 5 年 3 月にアルスから日本児童文庫の一冊として発行された『日本昔話集上』であると指摘している[13)]。この本は，昭和 2 年に既にアルスから刊行が予告されており，当初の企画から発行まで少なくとも 3 年の年月を要したことになる。なお『日本昔話集下』は，金田一京助他編により沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮の昔話を集めたもので，上巻より一年早く刊行された。本書の刊行に時間がかかったのは，柳田が全国の昔話の収集に手間取ったためと推測される。刊行時には典拠は明示されなかったが，後の昭和 35 年に同書の改訂版として出版された『改訂版日本の昔話』において明らかにされた出典によれば，本書は先の高木の『日本伝説集』から複数の昔話を転載しており，大正 11 年（1922）の高木の死去が柳田の昔話研究に何らかの影響を与えたことは想像に難くない。

先に挙げた，最初のグリムへの言及がある昭和 3 年の「昔話解説」は，まさに本書の執筆時期に書かれており，また，本書が刊行された昭和 5 年以降，着実に昔話に関する論考が増えていく。とくに，柳田の昔話研究の始発点とされる『桃太郎の誕生』には，昭和 5 年 1 月の同題の講演が収められているが，ここでも 5 か所においてグリムに関する言及が見られる。ここで柳田が特に注目しているのは彼我の昔話に類話が存在することであり，そのような比較を通して柳田は日本の昔話の性質をつかもうとしていた。このように，柳田の昔話研究はグリムへの関心と密接に関わっているのである。

さらに柳田は昭和 6 年（1931）4 月に刊行された雑誌『旅と伝説』に

13）石井正己「日本のグリム――柳田国男と佐々木喜善」（『ユリイカ』1999 年 4 月）

「昔話採集者の為に」と題して，昔話の採集を幅広く呼び掛けていくことになる。こうして柳田は，昔話を集めた本を出版し，昔話に関する論考を次々に発表し，全国の昔話の採集に取り組んでいく。このように昔話に興味を持った柳田が，昔話研究の先駆者としてのグリムに関心を持つのは，一見すれば当然のことのようにも思われる。しかし，それだけでは，なぜこの時期に柳田が昔話に，そしてグリムに関心を持つに至ったかという問いの答えにはなっていない。

なぜ，この昭和初期に柳田は昔話研究に情熱を傾けていったのであろうか。その背景について考えてみたい。柳田は，大正 10 年（1921）5 月から大正 12 年（1923）12 月まで国際連盟委任統治委員の職にあり，二度にわたって渡欧したが，その際にヨーロッパの最新の民俗学や民族学の研究に触れ，多数の文献を購入して帰国している。その中には，ボルテ／ポリフカによる KHM の注釈書（柳田は『グリムの御伽噺細註』と訳している）1 ～ 3 巻も含まれていた[14]。帰国後の刊行になるが，柳田文庫に所蔵されている同書の第 4・5 巻の「昔話の歴史」には無数の下線が引かれているという[15]。この本が柳田のグリム研究を導いたと思われる。

他にも柳田は帰国後のこの時期に，集中してさまざまな外国の文献を読み込み，自身の民俗学研究の理論的な基盤を作っていった。その際に柳田が選び取った指針の一つが，グリム兄弟による民間伝承研究であり，KHM であった。昔話研究への傾斜は，そのような柳田の研究姿勢と結びついている。そしてそれは，柳田の民俗学がドイツ民俗学の濃厚な影響のもとに成立していることと無関係ではありえないのである。

14）全 5 巻のうち滞在時に刊行されていたのは 3 巻までで，4，5 巻は 1930，32 年の刊であるため，帰国後の輸入と推定される。（高木昌史「柳田のヨーロッパ口承文芸研究 1．昔話」，同編『柳田國男とヨーロッパ――口承文芸の東西』所収，三交社，2006 年）

15）高木昌史，前掲註 14。

4. ドイツ民俗学とグリムと柳田

早く，岡正雄が指摘しているように，柳田民俗学はドイツ民俗学ときわめて近接する関係にある[16]。この点については，以前に拙著において論じた[17]ので詳しくは繰り返さないが，イギリスやフランスより遅れて近代化したドイツにおける国民文化形成の経験が，ヨーロッパに対抗して自国の文化を作り上げていった日本の民俗学に生かされたと言えよう。柳田がこのような研究の方針を決定したのがこの昭和初期の段階だったと思われるのである。さらに，そのドイツ民俗学を最も早い段階で基礎づけているのが，グリム兄弟による民間伝承研究であった。柳田は，自らの研究方針を明らかにした昭和 10 年の『郷土生活の研究法』において，以下のように記している[18]。

> グリムの有名なる児童家庭説話集（K・H・M）は，今でも採集記録の手本にしてよいほど，精確にして且素朴なる聞き書きであつた。この書が世に出る前にも獨逸の少年たちは，各自その一部分づゝをやゝ取り止めなく，聴いて記憶して居たことは事實であるが，それを隈なく全國に探り求めて，後世萬人が利用し得る形に，保存してくれたのはグリムであつた。その上に彼らはこれを研究して居る。（中略）フオクロアといふ語を發生した國（引用者註：イギリス）でも，勿論それ以前から同じ採集は始まつて居た。しかし唯こんな奇妙な事實がある，かういふ變ちきりんな言ひ傳へを持つて居ると，よそ事のやうに紹介して居たのとは違つて，此方は何でもこの方面の観察の中から，

16）岡正雄「日本民俗学への二，三の提案――比較民俗学の立場から――」（『日本民俗学の歴史と課題』日本民俗学大系 2，平凡社，1958 年）

17）拙著『民俗学・台湾・国際連盟――柳田國男と新渡戸稲造』（講談社選書メチエ，2015 年）152 ～ 158 頁。

18）以下，本文の引用は，『柳田國男全集』8（筑摩書房，1998 年）に拠った。

大よそこれだけのことは明かになつて行く筈だと，あらまし計劃を立てゝ取掛つて居たのである。

グリムによる採集が「精確にして且素朴」であったかどうかは，今日では疑問の多いところであるが[19]，重要なのは柳田がそのように理解していたことであろう。上記に明らかなように，イギリス民俗学においては「奇妙な事實」や「變ちきりんな言ひ傳へ」すなわち，古い習俗の残存として否定的に捉えられていた民間伝承は，ドイツにおいては「ドイツらしさ」の象徴と肯定的に位置付けられ，自国の文化を解明する手がかりとして扱われていた。そのような民間伝承に独自の価値を認める態度を柳田は高く評価している。ここに柳田が研究の基盤をイギリス民俗学ではなくドイツ民俗学に置いた理由がはっきりと示されているのである。

さらにこれに続く文章において，柳田は以下のように記している。

グリムは一方には人も知る如く，言語學に於ても鬱然たる大家であつた。これまで書いたものには傳はらなかつた獨逸語の歴史を，現實に今の世に行はれて居る事實を資料として，比較によつてこれを跡付けて見ようした方法の創始者であつた。少なくとも田夫野人の言行なるが故に，これを未開地の土人のそれと同様に，外部の事實の如く處理しようとはしなかつた。言はゞ内省派とも名づくべき史學の開祖であつた。

ここでも柳田は，グリムがごく普通の人々が伝えた言語伝承を「田夫野人」の言行として見くだすことなく，むしろ「歴史資料」として正当に評価した態度を是とし，受け継ぐ意図を明確に示している。柳田が言語研究と昔話研究を自身の民俗学研究の柱の一つに据えていること，文献によらない民間伝承を「比較」することによって，過去を明らかにすることを方

19）河野眞「永遠なる「グリムのメルヒェン」」（『ユリイカ』1999 年 4 月）

法として採択していることを思うとき，この記述は看過しえない。柳田の『蝸牛考』に代表されるような方言研究もまた，グリムとの結びつきから検討し直す必要がある。柳田はグリムをまさに民俗学研究の「お手本」として研究を進めていったと言ってよいのではないか。

また，上記において柳田が「内省派」という語を用いていることに特に注目しておきたい。『郷土生活の研究法』において柳田は自身の学問を「平民の過去を知る」ために「自己の内省」を促すものと規定している。たとえば「平民の今までに通つて来た路を知るといふことは，我々平民から言へば自ら知ることであり，即ち反省である」(郷土研究とは何か)「我々の採集は兼て又，郷土人自身の自己内部の省察であった」（郷土研究と文書史料）と記す[20]。柳田民俗学はまさに「内省の学」として，ごく普通の人々の暮らしを振り返ることを通して，日本の民俗社会における心性のあり方を追求していった。柳田にとって民俗学とは，文献によらない歴史学だったのである。上記の文章において，柳田はまさにそのような「内省派とも名づくべき史學の開祖」をグリムに置いている。民間伝承を正確に記述し，記録するだけでなく，そこから平民の過去を知る手掛かりを得ること。それは繰り返すが，民間伝承を文献によらない「歴史資料」として位置付け，価値を付与することだった。

このように考えるならば，なぜ昭和初期において柳田が昔話研究にのめり込んでいったのかという疑問が氷解する。それは東北地方の昔話を次々と意欲的に出版していた佐々木喜善に対する対抗意識などといったレベルの問題ではない。柳田の民俗学の根幹にかかわる問題なのである。

つまり，柳田は昔話研究にのめり込んでいったために，グリムへの関心を強めたのではなく，事実はその逆であって，この時期に柳田はドイツ民俗学を自らの学問のモデルと定めたために，その「始祖」たるグリムに倣って言語研究と昔話研究を軸に据えた独自の民俗学へと邁進することになったと考えられるのである。このようにして，グリムと KHM は柳田に

20）柳田國男『郷土生活の研究法』（前掲註 18）

よって「再発見」された。それは当時の日本で一般に理解されていたような児童向けの教訓的な「童話」の語り手ではなく，「昔話」研究の大家であり民俗学の先駆者としてのグリムであり，「歴史資料」としてのKHMであった。柳田が昔話に関する論考において，執拗に「童話」という訳語を否定しているのはそのためである。

5. おわりに

以上のような柳田民俗学がグリムから受けた強い影響を考えるとき，問題となるのはナショナリズムへの傾斜であろう。柳田は「一国民俗学」を標榜し，民俗学の研究対象を日本の国内に限定していく。そして，日本人の精神性や日本文化の特殊性を明らかにするという学問の目的を据える。これはナショナリズムを反映したものではなく，むしろ文化相対主義に基づいて，各国が国際社会に対して積極的に自国の文化を発信していくためにこそ，それぞれが独自の文化を研究するべきというのが柳田の主張であった。柳田は諸民族，諸地域の文化の独自性が尊重されねばならないと考えていた。このとき，柳田がモデルとしたのが，先述したようにドイツ民俗学だった。

大正15年（1926）4月，柳田は日本社会学会で行った「日本の民俗学」と題する講演において，ドイツの学問が自国の民俗を研究対象とした「フォルクスクンデ」と，諸外国を対象とした「フェルケルクンデ」に分かれていることを指摘している。柳田はこの違いを，文化相対主義の権威であったフランツ・ボアズから教わったという[21)]。両者の関係は当時の日本における民俗学と民族学（文化人類学・エスノロジー）の関係に相当するものであり，そのような研究対象の違いによる学問の分担関係をドイツに倣うことを柳田は主張した。こうして民俗学の研究対象は日本の国内に限定されていくのであって，ここでは柳田が「一国民俗学」のモデルをドイツに求めていることが明確に表明されているのである。

21）柳田國男『青年と学問』（『柳田國男全集』4，筑摩書房，1998年）

しかし，このような柳田の「一国民俗学」が，文化相対主義に拠りながらも，結果として日本のナショナリズムを下支えするものであったとするなら，グリムとドイツナショナリズムの関係がその背後に控えていることの意味は大きい。グリムはまさに，「ドイツ人らしさ」をメルヒェンの中に見出そうとしていたのではなかったか。というよりもむしろ，メルヒェンによって「ドイツ」という幻想を作り出したのではなかったか。それは，メルヒェンという「伝統」を，体裁を整えて近代的な「国民国家」へと接続する作業であったといえよう[22)]。そして，そのようなグリムのメルヒェンが日本では教育学者たちによって教材として導入されたために，子供向けの教訓的な「童話」として消費されている状態から救い出し，それを再びもとの「民間伝承」へと還元し，日本の昔話へと接続し直したのが柳田だった。このとき柳田は，昔話から民俗の心性を読みとくという研究の視座を獲得したのである。

大友文は柳田とグリムの共通点として以下の 3 点を挙げている。第一に「常民」‘Volk’という概念が研究の中心に据えられている点，次に，ともに母国語，特に方言の重要性を主張していること，さらに口承文芸を通して民衆の根元的思想，文学を見出そうとした点である[23)]。私はこの大友の指摘を引き継ぐ形で，柳田の「常民」概念の形成過程を検証する必要があると考えている。柳田とグリムに共通するのは「上からの文化」すなわち「芸術」のような権威的な都市文化に対する強い反発であり，その対極にある民俗文化こそが「本物の文化」であるという思想的反転である。そのとき，口承文芸は最も根幹的な文化として価値づけられ，「ドイツとは何か」「日本とは何か」という問いへと接続されることになる。

柳田は口承文芸を「伝説」「昔話」「世間話」に大別し，その中でも特に

22）池田香代子「三題噺——グリム・近代・国民国家」（『ユリイカ』1999 年 4 月）

23）大友文「小波・柳田・グリム兄弟——「口承文芸」の成立に関して——」（『昔話——研究と資料』29 号，2001 年 7 月）

昔話研究に力を注いでいるが，それは柳田がグリムの強い影響下にあったためと考えられるのである。そのとき，柳田の昔話研究は，昔話に民俗の歴史を担わせることによって「日本」という幻想を紡ぎ出すことになるだろう。あたかもグリムがKHMによって「ドイツ」を作り出したように。それは日本とドイツが共に後発的な近代化によって先進国に参入し，それゆえアイデンティティの危機を抱えていたことと決して無縁ではない。柳田とグリムはこのようにして，相似的な関係にある。それは，近代的な国民国家への民俗文化の接続による，民族のアイデンティティの創出という太い糸によって結ばれているのである。